

2011 年度 リーディング・ユニバーシティ募金による

「21 世紀社会のリーダー育成」助成金 活動報告書

経済学部 西澤栄一郎ゼミナール

活動総括

テーマ：長野県飯田市の鳥獣被害対策

目的：

西澤栄一郎ゼミナールでは、環境・農業問題をテーマとしたフィールドワークを行い、実態調査や政策提言などを通しての地域貢献を目指している。今年度は昨年度に続き長野県飯田市における鳥獣による農林業被害を取り上げる。同市の農林業被害は年間 1 億 5 千万円を超える。昨年度の経験を踏まえ、具体的な対策として、集落一体での防除体制の構築、防護柵設置管理ボランティアの導入などを提言し、行政機関と地域の人々に対してヒアリングや意見交換を重ねる。この活動を通じて、地域の問題を発見し、その解決に率先して取り組もうとする人材の育成につなげていく。

計画：

昨年の活動を踏まえ、集落全体で被害防止に取り組むことが重要と考え、集落での鳥獣対策の学習会などに参加し、農家の方々と意見交換を行う。その際に事前に調査した各地の対策について情報を提供する。また、防護柵の設置にボランティアを活用することを提案し、具体的な仕組みを地域の人々と検討する。

活動内容：

調査対象地域は、昨年調査した 2 集落のうちのひとつ、飯田市南信濃の八重河内を選んだ。フィールドワークの事前準備として、前期に鳥獣害対策の各地での取り組み、農村地域でのボランティアなどについて事例を収集した。

8 月 4 日にゼミ長ほか数名で市役所と八重河内地区の自治会役員の方々を訪問し、打ち合わせを行った。

調査は 8 月 23 日から 27 日まで行った。まず、集落の各世帯を訪問し、聞き取りを行った。また、ボランティアの実効性を把握するため、草刈りや柵の補修などの作業を体験させていただいた。

つづいて、市役所に対して、鳥獣害対策にボランティアを利用すること、狩猟免許取得者が自治体の職員として狩猟を行うガバメントハンターを導入すること、緩衝帯事業の 3 つの対策を提案した。事前に提案内容を送付したうえで、市役所においてプレゼンテーションをさせていただき、意見交換を行った。この会には市役所のさまざまな部署から 9 名の参加を得た。

さらに、集落ぐるみの対策が重要なことから、集落の皆さんと意見交換会を開催した。この会では、事前に作成した獣害対策に関するパンフレットを配布し、対策についての学生による発表のあとで意見交換を行った。住民の方が 12 名、市役所から 2 名、農協から 1 名の参加があった。

このような活動は地元の新聞社やケーブルテレビ局の取材を受けた。

フィールドワークのあと、調査と現地での活動のまとめに取り組んだ。10 月 31 日には経済学部の環境関係の 5 ゼミ合同発表会にて報告した。また、11 月 26 日には成城大学で開催されたインターカレッジゼミナール（成城大学、東京農業大学、明治大学、法政大学が参加）において報告した。

報告書は年内にとりまとめたが、印刷・製本が完成したのは 1 月中旬となってしまった。報告書は関係各所に送付した。この報告書も地元の新聞で紹介された。

さいごに、2 月 22 日に飯田市役所で報告会を開催した。市役所での意見交換会での指摘を踏まえ、調査のまとめを報告した。市役所の各部署から 10 名と南信濃の住民の方 1 名の参加を得た。参加者からは好意的なコメントをいただいた。

今後の展望：

鳥獣害について 2 年間調査をしてきたが、今年はテーマを小水力発電に変えて、飯田市で調査をする予定である。南信濃地区で住民主体の小水力発電事業の計画が進められている。また、八重河内の皆さんには 2 年にわたって大変お世話になったので、また訪問したいと学生たちは言っている。

成果：

地域貢献という大きな目標を掲げ、評価基準としては、地元の人々の、ゼミ活動への評価を据えた。フィールドワークでは、草刈りなどに対して感謝されたが、学生たちにとって印象的だったのは、住民のみなさんから「若い人が来てくれるだけでうれしい」と言われたことであった。そのことが、獣害対策から地域活性化へと視野を広げることにつながった。若い人がさまざまな形で訪れることが地域のためになるのであれば、この土地の魅力をアピールして人を呼ぼうという考えを持つようになった。こうした気づきが学生たちにとって最も大きな成果である。今後は自分で継続的にこの地域を訪れ、また人を呼び込む企画を地域の人たちとつくっていくような活動につながっていけば望ましい。

添付資料：

報告書「獣害問題から地域を考えるー長野県飯田市ー」
飯田市での報告会資料（スライドのプレゼンテーション）
新聞報道

「21世紀社会のリーダー育成」助成金 学生報告書

法政大学経済学部 西澤栄一郎ゼミナール 09C1219 高橋 広大

今年度、長野県飯田市における野生鳥獣害の軽減を目指した活動を行うことになった背景には、昨年度の活動がある。昨年度、「長野県飯田市における野生鳥獣害の実態調査」をテーマとして同地域での活動を行った私たちは、ヒアリングやアンケート調査を行い、多くの地域住民や行政、森林組合の方々のご協力をいただいております。また、実際に被害が多い地域に足を運んで周辺環境を調査するなど懸命に活動した結果、問題の現況や被害を助長してしまう要因を学び、行政や森林組合、住民の方々それぞれの苦勞や問題を抱えていることを理解することができました。一年間の活動ということで、具体的な改善策の考案まではたどり着くことができなかったものの、実態調査としてはなかなかの出来だったのではないかと現在でも感じている。しかし、温かく調査にご協力いただいた方々の多くが深刻な被害感情を滲ませながら苦勞話をされている姿を目の当たりにした私たちには、この問題を解消することで地域に還元していきたいという気持ちが芽生えており、これが今年度のテーマ選定の決定的な理由となった。

活動の第一歩として、前年の調査結果から問題を助長する要因を整理し、大きく分けて2つに分類した。まず1つ目が労力面の問題である。被害の多い地域では住民の高齢化や過疎化が進行しており、対策にかけることができる労力が欠如している。例えば、野生動物から農作物を守るためには田畑に被害防除柵を設置し、適切に維持管理を行うことが絶対条件であるが、足腰の悪い方が多い過疎地域ではこれらの作業を自分たちで行うことができないため、壊れた柵を修復することもできず、被害を増加させてしまっている原因となっているのである。2つ目の要因は集落環境の整備不足である。人間に被害を与える野生動物は、人間側からしたら脅威ではあるが、野生動物たちも非常に警戒心が強いので、基本的に身を隠しながら生活をしている。従って、動物の隠れ場所を集落内に作らないということが対策の効果としても大きいのであるが、やはり被害の多い地域では隠れ場所となる草むらや耕作放棄地が集落内に点在し、森林と隣接している田畑も多いために容易に進入を許してしまっているようであった。従って、これらを刈り払うことが必要となるのだが、これには労力面の問題も大きく関連していると言える。私たちは以上の2つに焦点を当て、他地域の事例を参考に対策を考案した。

まず、労力面の問題を改善する対策としてボランティアの利用を考え、市役所に提案を行った。ボランティアを利用することで労力問題を解消できるほか、若者と交流することで地域の高齢者に喜んでいただけるのではないかと感じたためである。市役所では前年の調査結果を伝えてボランティアの必要性を主張し、他地域の成功事例も紹介した。加えて、提案前日に私たち自身が現地で防除柵の修復作業や耕作放棄地の刈り払いを体験し、現実的にも可能であると訴えかけた。

集落環境改善のためには、集落環境調査と意見交換会を行った。集落環境調査では、防除柵の状態と、動物の隠れ場所となる耕作放棄地や草むら、林縁部の状態をチェックし、被害を助長しているポイントを改めて調査した。意見交換会では地域住民の方々と市役所職員の方々にご参加いただき、私たちからはボランティアや隠れ場所撤廃の必要性を主張

し、集落環境調査の結果を報告した。意見交換会のねらいは、私たちが蓄えた知識を伝達するほか、地域内、地域と行政間との協力体制の強化も含んでおり、非常に有意義な時間となった。

野生鳥獣害の軽減こそが地域貢献になると思い、現地での活動のために様々な努力を行ってきた私たちであったが、いざ改めて現地で調査を行っているところ、野生鳥獣害の原因となっている過疎化を改善することこそが地域の求めているものであると感じた。現地の方々は野生鳥獣害を決して軽視しているわけではなく、実際甚大な被害に遭われている方が多いのであるが、問題の根底にある過疎化が原因で地域活力が低下しつつあり、付随して野生鳥獣害が大きくなっていることを現地での活動中に気付かされた。従って今後は、いかにして過疎が進む地域に若い人を呼び込み、地域を活性化させていくかが課題であり、また、地域の方々が求めているものだと感じた。

活動を終えて、助成金の目的であるリーダー育成ということも絡めながら振り返ると、私個人としてはゼミ生の代表として責任ある活動を送ることができ、市役所や現地住民の方々との連絡など、大変貴重な経験ができたことを本当に喜ばしく思っている。さらに、代表であった私のほかにも各ゼミ生が本当にリーダーシップを発揮してくれた。というのも、当初の副代表 2 人が、留学や震災による影響で早い時期にゼミを退いてしまった。その後、ゼミ生の役割を細分化し、各々が専門性の高さを利用して下級生はもちろん、ゼミ全体を引っ張ってくれた。例えば前にも触れたが、現地で野生鳥獣害の軽減を目指した活動を進める中で根底にある地域活力の低下に目を付け、ゼミ生に対して意見を投げかけたのは私ではなく担当教授でもなく一人のゼミ生であった。彼は地域の魅力を把握してそれをPRして地域に若者を呼び込むことの必要性を主張し、他のゼミ生を巻き込んで地域の特産物や名所を調査してくれた。この調査については当初全く予定していなかったものである。現地での活動を終えて報告書の作成に取り掛かるころには、彼をはじめ、他の3年生や下級生もそれぞれの専門性を活かして自発的に執筆に取り組んでくれた。決して誇張ではなく、本当に一人一人の責任感、自発性を高めることができたと感じている。最後に、西澤ゼミを支えてくださった飯田市の方々と法政大学関係者の方々に深く感謝いたします。



民家でシカなどによる農業被害について話を聞く法政大の学生たち

中山間地 農作物の鳥獣被害

法政大の学生 現地調査

飯田

飯田市の中山間地域での野生鳥獣による農業被害について、法政大経済学部西沢栄一郎教授（環境政策論）のゼミに所属する学生が23日、5日間の日程で現地調査を始めた。南アルプスの麓に位置する南信濃地区に滞在して住民への聞き取りを行い、年々深刻化しているニホンジカなどによる農作物への被害の実態を調べる。

農作物をシカに食べられた状況を説明したほか、「夫を亡くして農作業は人頼み。（高齢化に伴い）頼む人も減って

きている」と話していた。3年生の高橋広大さん（22）は「過疎化が進み、獣害により農業をあきらめる人もいる。あらためて困っていることを調べ、（調査結果を）地域貢献につなげたい」と語った。同ゼミの学生らは2008年度から同市を訪れている。森林資源の活用などを学ぶ中で野生鳥獣被害について関心を強め、10年度から研究の柱に据えている。市内の農家組合を対象に農林業被害を尋ねたアンケートなどの結果を報告書にまとめている。

信濃毎日新聞 2011.8.24

2011年(平成23年)8月27日(土曜日)

鳥獣被害 現場で調査

法政大生飯田で作業体験

野生動物による農業被害などを学ぼうと、法政大の学生が飯田市内南信濃を訪れている。学生らは二十六日、聞き取り調査などの研究結果をもとに、市職員と意見交換をした。

(木下直哉)

市職員と意見交換も

訪れているのは法大経済学部の二、三年生十八人。同学部西沢栄一郎教授のゼミに所属し、経済活動と環境の関係を学んでいる。同市への訪問は四年目。二十三日から四泊五日の日程で南信濃八重河内地区に滞在。草刈り、柵の補修など被害対策の作業体験や、地元住民への聞き取り調査などのフィールドワ

三年高橋広大さん(三)は「大学での学習と聞き取り調査や市の意見にギャップがある、あらためて難しい問題と実感した。大学に戻っても研究を続け、結果を地域に役立てたい」と話している。



鳥獣害対策などについて飯田市職員と意見交換する法政大の学生ら(飯田市役所)

1723 8/27

第3種郵便物認可

(10)

中山間地の獣害対策探る

南信濃で 法大生が現地調査し、提言

昨年から飯田市の南信濃地区などで野生鳥獣による中山間地の農業被害について調べている法政大学経済学部から同地区で現地調査を行っている。26日に西沢栄一郎教授（環境

政策論）とゼミに所属している学生。26日までに3泊4日の期間で南信濃八重河内の民宿島畑に滞在し、同地区の集落をめぐって環境調査や被害対策の現場を学んでいる。

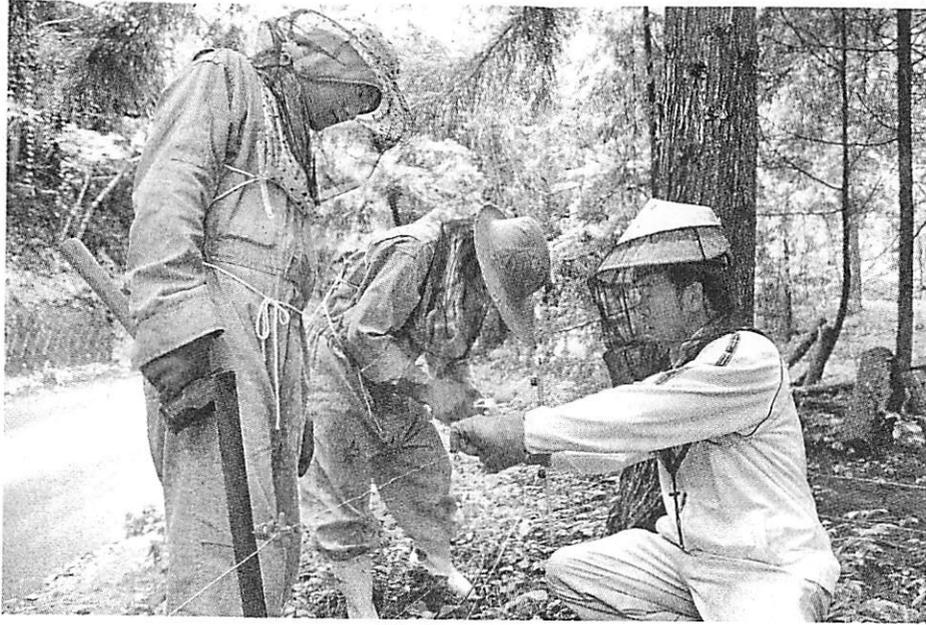
25日には、2年生の平良岬さん（19）ら3人のグループが養蜂業を営む大屋敷藤さん（57）に同行。押出地区の施設でクマから養蜂箱を守る電気柵の修繕作業などに従事した。

大屋敷さんは「南信濃で調査してくれることは大変ありがたい。しっかりと提言をまとめて、地域のために役立ててほしい」と期待を寄せていた。

大屋敷さんから獣害の状況を聞き、電気柵を維持することの困難さなどを聞き、ワイヤの緊張度を保つために杭を打ち直し、ろう電の原因となる下草を刈る作業を続けた。

同ゼミはこれまでの調査の中間まとめとして一般から協力者を募って対策施設の整備、修繕活動などを進める獣害対策ボランティアの募集や行政職員自らが狩猟免許を取得して

「今回の調査では獣害対策まで十分な手を回すことができないう集落の実態を学べた。今後、実情を踏まえた解決策を探って、良い形で提案していきたい」と話していた。



電気柵の修繕体験

平良さんは「この地域では高齢化や担い手不足が深刻で、獣害から守るよりも前に集落を維持することが課題だと知った。新たな問題に直面したが、しっかり考えていきたい」と話した。

大屋敷さんは「南信濃で調査してくれることを大変ありがたい。しっかりと提言をまとめて、地域のために貢献したい」とゼミ長の高橋広大さん（22、3年生）。

「今回の調査では獣害対策まで十分な手を回すことができないう集落の実態を学べた。今後、実情を踏まえた解決策を探って、良い形で提案していきたい」と話していた。

度一般会計予算に計2500万円を盛り、6月中旬に250件に達して締め切った。申請時の工事費は計2億9500万円余という。

濃信 法大生食害の調査報告

農作業のボランティア提案

飯田市南信濃地区で昨年、ニホンシカなどの野生動物による農業被害について調べた法政大の学生らが、報告書「獣害問題から地域を考える―長野県飯田市―」をまとめた。住民らへの聞き取りなどを基に、高齢化が進む中山間地域の農地を守る対策としてボランティア導入を提案している。

日間、南アルプスの麓にある南信濃地区に滞在し、八重河内集落の民家を回った。住民からシカや狼などによる農業被害を聞き取り、住民や市職員らとの意見交換会も開いた。



飯田市南信濃の民家を訪れ、シカなどの農業被害について尋ねる法政大の学生ら。昨年8月

は活動報告などを盛り込んだ。被害の軽減策には、シカなどの侵入を防ぐ防護柵や、里山と農地を分ける境界の設置などを挙げた。住民の高齢化で深刻化する担い手不足を踏まえ、兵庫県や京都府など

の事例も挙げて農作業などへのボランティアの導入を提案。「多くの人を継続的に集めることが効果的」とまとめている。

伊那 調査には、経済学部の西沢栄一郎教授（環境政策論）のゼミに所属する2、3年生18人が参加。昨年8月に5

伊那 南ア食害対策協 17日活動報告会



南アルプスの亜高山帯にくくりわなを仕掛ける猟友会員。昨年11月

南アルプスで深刻化するニホンシカの高山植物の食害や踏み荒らしをめぐり、南ア食害対策協議会（事務局・伊那市）は17日、本年度の活動報告会を伊那市役所で開く。新たに始めた「くくりわな」による捕殺の現状や課題などを

防護柵設置を主に進めてきた。くくりわなは動物が板を踏むとワイヤの輪が締まって脚が抜けなくなる。昨年11月、南アの亜高山帯に設置した。

報告会では、これらの活動を同市耕地林務課が紹介。同学部調査チームは、防護柵内の植物の復活大見、直生大見

用にする場合に変化をできるだけ抑えるための提案もする。環境省は、昨年9月にまとめた南ア国立公園生態系維持回復事業計画などについて報告する。

午後1時半から。入場無料。問い合わせは同課（☎0265・78・4111）へ。

杜仲の特産品を 都内でPR展示 質輪の製造販売会社など 東京ビッグサイト（東京・有明）で10日まで開催中の展示商談会「ニッポンいいもの

の不由る情報提供が不足している。一との指摘も複数あった。

中間駅位置案（直後5キロ）内にある飯田市座光寺の湯沢英範自治会長（70）は会議を傍聴後、「各自治体があつと地域色のある要望をしても良かったと思つ」と話した。